



とうきょう すくわくプログラム

2025年度活動報告書

世田谷祖師ヶ谷大蔵雲母保育園



テーマ【 光 】

設定した理由・背景

保育室にある大きな窓から差し込む陽の光が心地よく、子どもたちも温かさを感じながら過ごしている。「温かいね」、「お日様」というやりとりも多く、光というテーマから子どもたちの新たな興味や関心が膨らんでほしいという思いからこのテーマに至った。また、光遊びを通して、様々な物の見方を楽しみ興味深く観察する姿が見られている。不思議に思う気持ちや、視覚的な感覚が敏感な時期だからこそその発見や体感を味わうことで、より面白さを感じながら探求心を深めていけるのではと考えた。

用意した環境設定

- ・室内を暗くし、影絵や光を照らせるようにした。天気の良い日には窓からの光を利用し、園外保育環境としては自然豊かな公園を選定した。
- ・購入物品：ブラックライト・クリスタル積み木・LEDライト等

活動のあゆみ

6月：クリスタル積み木を利用し、色の混ざりあいや光に透かして見える面白さを活動を通して行う。

7月：クリスタル積み木を水の中に入れてたり、光と水が入ることで見え方や楽しみ方が変わり様々な変化を知る活動を行った。

9月：戸外活動では影探しを行う。

11月：蛍光絵の具で作った製作をLEDライトで照らし、暗くても光が当たることで見える不思議さや気づきに繋がる活動を行う。

✧探究活動の実績✧

保育室の窓から差し込む陽の光を眺め、何だろうという子どもたちの不思議な表情を保育者が代弁しながら「光ってなんだろうね」という言葉かけから始まった。0.1歳児クラスでは、クリスタル積み木を使い、初めは視覚的な楽しみから興味に繋がった。光に当たると積み木の色の見え方も変わり、子どもたちは色への興味も示し、光の反射で写った地面の色に手を延ばすなど普段とは違う発見に不思議そうな表情や、何だろうという興味をもった表情も見られた。また、戸外活動では、視覚で楽しむことを主としたところ、子ども自身が影の存在に気づいたところから影を使った葉っぱ遊びに繋がっていく。壁に写った影を指さしたり目で追ったり、影が葉っぱではなく別の生き物のような感覚で捉えている様子が伺えた。保育者が葉っぱをちぎって葉っぱお化けにすると、ようやく保育者が持っている葉っぱだと気づく様子や、影をじっと見つめていると友だちの姿をみて一緒に影を眺めるなど言葉はなくても面白さや不思議さを共有する姿があった。0.1歳児では、「光と影」、「光と色」等、2つの要素が混ざり合うことで子どもの興味や面白さの感覚は深まっていったように感じる。2歳児ではライトを使った光の探求を楽しむ姿が見られた。室内を暗くするとライトの光がよく見える事、明るいと思えない事、光をもとに明るい・暗いという感覚を理解していった。子どもの気づきをもとに、黒い画用紙に蛍光絵の具で絵を描く環境を整えた。暗い=光するという子どもたちの気づきがより探求に繋がるようにし、「この絵も光るかな?」という言葉をかけることで、ライトで照らしたいという子どもの興味を活動に繋がせた。出来上がった製作を保育室に飾り暗くして子どもたちにライトで照らしてもらった。ライトに照らされた蛍光絵の具が光って見え、子どもたちの驚きとやっぱり光ったという結果に喜ぶ姿が見られた。2歳児も絵や水、影といった光とは別の要素が組み合わせることで、子どもたちの何で?という疑問や不思議に思う気持ちが大きくなっていくことを実感できた。



光によって映った影に気づき、手を延ばし、つかまえようとする様子。



様々な素材にライトの光を当てる様子。



室内を暗くして光の強さ、明るさを知る様子。

まとめ

夏の水遊び期間では、透明カップやクリスタル積み木を準備した。透明カップに色のついたクリスタル積み木を入れると、「水も入れてみよう」という子どもの興味が高まり見守ると、陽の光に照らされたクリスタル積み木が輝いて見えたり、水が入っていることで少し揺れて見えたり、子どもたちの発見が多く見られた。光だけではなく、色・水などの他の要素が入ることで子どもの心が動く瞬間は多くあったように感じた。何気ない生活の中にある光でも、特別な環境や工夫、意味をもたらすことで子どもたちにとっての興味がより高まり、探求意欲がわくことを実感した。また、今回は「光と影」「光と色」等、様々な要素を組み合わせる事もあり、子どもたちの不思議に思う気持ちや何だろうという疑問や興味を強く感じた。暗い明るい等の視覚的にわかりやすい環境と、水や影などの事象を通して、子どもたちが何に面白さを感じるのかを考察していきたい。



とうきょう すくわくプログラム

2025年度活動報告書

世田谷祖師ヶ谷大蔵雲母保育園



テーマ【 自然 ～生き物～ 】

設定した理由・背景

保育園の周辺にはたくさんの公園があり、子どもたちにとって興味がわく場所も多くある。また、保育園で育てているデコポンの木では、毎年幼虫を発見したり、デコポンの収穫をしたり、自然や生き物との繋がりを日常の中で感じる事が出来ている。その中で、子どもたちにとっての当たり前を特別に感じることで見えてくるものはあるのだろうかと思い、生き物に焦点を当てることにした。また、戸外活動中に虫探しに夢中になる姿が見られてきた。幼虫を見つけては観察し、大きくなったらどのような生き物に成長するのかを楽しみにしている様子が日に日に増してきている。自分たちの知らない自然や虫への興味を深めながらも、想像する楽しみや卵から孵化するまでの不思議さを子どもの豊かな発想や視点からより深めていきたいと感じ設定した。

用意した環境設定

- ・雲母保育園でのお泊り保育、田植え、稲刈り等の自然体験や園外保育での生き物探しを行う。
- ・購入物品：大きな虫かご・虫眼鏡・季節の図鑑

活動のあゆみ

- 5月：田植え体験
- 6月：野川の探検
- 7月：保育園で育てているデコポンの木から見つけたアゲハ蝶の幼虫を観察する。
- 8月：アメリカキャンプ村（生き物探し）
- 9月：虫探し
- 10月：里いも掘り・稲刈り体験

✧探究活動の実績✧

6月、戸外活動では虫探しを行ったり何の幼虫が分からない物にも大きくなったら何になるのかな？と、虫への興味・関心が高まっていた。図鑑等で調べの中で、アメリカキャンプ村でも虫探しができるよという会話をきっかけに、生き物図鑑等で川にいる生き物、植物等を調べるようになった。普段行く公園だけではなく、喜多見の野川付近まで探索に行き、川でザリガニを見つれたり探索中にバッタや蝶をみつけ、場所によって生き物の種類や数も違うことを子どもたち自身が感じていた。

7月、自園で育てているデコポンの木に幼虫がいることを発見し、育ててみたいという子どもたちの意見があり、虫かごでの観察が始まった。デコポンの葉っぱをよく食べていて、無くなっていることを発見すると葉っぱを取りに行ったり、友だちと毎日のお世話を楽しみにする姿が見られた。「アゲハ蝶になるよ」「キアゲハ蝶かも」と、日々の観察から、自ら蝶の種類を調べたり友だちと知っていることを話し合ったり、自ら知ろうとする姿も多く見られてきた。8月、アメリカキャンプ村での川遊びでは、小さなえびを見つれたり捕まえたり、事前に調べた生き物を実際に捕まえることができた事が、子どもたちの充実感や満足感に繋がった。6月から8月までの生き物と子どもたちの関わりを見守っていくなかで、自然や命の大切さを伝えていく事も大切だと感じ、その都度命との向き合い方にも触れていった。8月、クラスで育てていたアゲハ蝶の幼虫が蛹となった。「生きている？」「動かないね」等、蛹になったと分かっているにもかかわらず不安な様子があり、クラスでも今の成長過程を話したり共有しながら過ごしてきた。羽化までたどりついたが上手く羽が広がらず羽ばたく姿は見られなかったが、子どもたちからいつもみんなが遊びに行く公園に戻してあげたいという意見があり、公園に戻すこととなった。大切に育ててきた幼虫の羽化までに成功も失敗もあったが、知りたいという探求心は深まっていったように感じる。

9月：新たな虫探しを行い、子どもたちからは今度は水をもっと多めにあげる等、次に繋がる探求心が感じられた。



お泊り保育の川遊びでえびやカニ探しをする様子。



アゲハ蝶の幼虫の観察をしている様子。

まとめ

子どもたちにとって奥多摩の川にいる生き物など、知らないことを調べたり想像する事は大きな関心に繋がっていた。実際に、当日もえびやカニを見つけることで調べた事との繋がりが発見した満足感も大きかったように感じる。また、実際の幼虫を毎日観察し、お世話をすることで子どもたちからの「次はどうなる？」「いつここからでてくる？」という子ども自身の声はとて多く感じた。川にいる生き物、アゲハ蝶の幼虫と、子どもたちにとって2つとも知らない事ばかりではあったが、実際に生き物を見て触れて考える機会が多くある方が、子ども自身の知りたいという思いは強くなるのだと感じた。

アメリカキャンプ村に向けての生き物探しから始まったが、保育園で育つアゲハ蝶の幼虫を見つけた事で、子どもたちの目的も変わっていった。その中で、子どもたち自身が知りたいというところから、観察や羽化までの様子を共有してきたが、上手く育っても失敗してしまっても知りたい、育ててみたいという終わらない探求心や興味・関心の気持ちが膨らみ、豊かな経験となった。上手く育たなかったから終わりではなく、いつも遊ぶ公園に戻してあげることや次に育てる時は水を少し上げてみる等、次への課題が子ども自身から出てきたことも大きな成長と感じる。子ども自身の課題に寄り添い、探求心を深めていけるようにしていきたい。



とうきょう すくわくプログラム

2025年度活動報告書

世田谷祖師ヶ谷大蔵雲母保育園



テーマ【 世界の文化 】

設定した理由・背景

雲母保育園では毎月オリジナルの献立を作成しており、海外のメニューを出すという強みがあった。また、献立の特集であった世界のスープ特集から、地球儀を活用すると、自ら地球儀を回して眺める様子が見られた。日本との距離やどの様な国なのか、知りたいと思う気持ちを受け止め、様々な国を知り日本との違いや食文化等の違いを学び、そこから生まれる子ども自身の疑問から探求に繋がっていきたいと感じたため。

用意した環境設定

- ・週3回のオンライン英会話 保育室に世界地図の掲示や国旗の本を置き、自由に見ることができる環境を作る。
- ・購入物品：世界地図・

活動のあゆみ

○通年を通して週3回のオンライン英語

5月：世界のスープ（献立）

7月：世界の食べ物

10月：ハロウィン

11月：世界の踊り

2月：世界の乗り物

✿探究活動の実績✿

昨年度はオンライン英語を楽しみ、子どもたちの世界への興味や関心が見られてきた。そこで、保育と食育の繋がりを通して5月の献立で世界のスープ特集を行うと、子どもたちから「この国してる」等の声も聞こえ、少しずつ生活の中での世界との繋がりが子どもたちにとっても嬉しい様子を感じられた。その姿から、今年度も「世界の文化」をテーマに、更なる探究活動を行うこととした。保育室に世界地図を貼ったり、自由に手に取れるように国旗の本を置いたり、子どもたちの知りたいという思いを自ら学べるように環境を整えると、友だちと国旗カードを見てはお互いでクイズを出し合う姿が見られるようになった。

地球儀で国の位置を確認したり子ども同士で知ろうとする姿も多く見られ、「日本とどれくらい離れているのか」という疑問や、「日本は小さい」等、距離や大きさへの関心が高まってきた。

オンライン英語を使った探究活動では、世界の踊りや乗り物を知り、日本との違いを知る機会となった。その後も、活動で気になったことを映像を通して確認し、興味を持続させていった。

7月・11月・2月と世界の文化に触れる機会では、子どもたち自身も多くの発見があった。異文化経験のある子どもたちが在籍している環境もあり、お互いの国や文化、言葉の違いを受け入れ関わっていく姿があり、知識が増えることでより文化の違いに面白さを感じるようになる。

距離や大きさを調べると答えは直ぐにでてくるが、感覚として理解できないところもあったため、次回の課題として考えていきたい。



世界のスープ特集献立から、国旗カードや地球儀を使ってどこにあるのか調べている様子。



オンライン英語を通して、国の大きさや違いを友だちと共有する様子。

まとめ

文化の違いについては映像等で踊り、食べ物等を見ることで子どもたちにとって分かりやすい理解に繋がったと感じる。話を聞くことと視覚的にみること、知識としてだけでなく「何でこの踊りがあるの?」「なんでここで食べ物売ってるの?」と、具体的な疑問があったように感じられた。子どもの知りたいという興味を持続させるため、世界の街並みや建造物などにも触れる機会を設けたが、何で?という疑問が自分たちの住んでいる日本と比べるようになってきた。子どもたちにとって分かりやすい活動環境を整えた事で、単純に疑問に思う事から自分たちの国と比べる疑問に変わっていったことに気づいた。今年度は週3回のオンライン英語と、実施回数を増やしたこともあり世界への興味・関心やわくわくする楽しみも大きく膨らんでいた様子であった。国旗カードや地球儀を使って友だちと知っている国や行ったことのある国探しを行い、知っている知識を共有する姿が見られた。また、世界の文化を友だちと共有したり、世界のスープ特集では実際に味わうこともできた。一つひとつの国の大きさや日本からの距離においては数字だけの理解になってしまったため、距離や大きさから世界を見ていく面白さを感じられる様に工夫していきたい。